
rewrite **オリ主転生であーだこーだ**

おかざき 祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

rewrite オリ主転生であーだこーだ

【Nコード】

N9555V

【作者名】

おかざき 祭

【あらすじ】

大学から帰って、普通に就寝したはずの瑞江柳は気が付けば赤ん坊になっていた。どうして、自分はこんなところにいるんだろうか？自分が転生した意味とは何か？うじうじと考える物語。

Rewriteのオリ主転生者。原作崩壊、独自解釈、ご都合主義あります。

はじめての小説で稚拙な部分が多々あると思いますがよろしくお願いします。

ブログっばい(前書き)

初小説、初投稿。よろしくお願いします。

プロローグっぽい

rewrite オリ主転生であーだこーだ

プロローグ

蜻蛉が辺りを飛び回り、夏から秋にゆっくりと季節が変わるそんなある日。

涼しい風に身を委ねながら、俺はいつもの公園でベンチに座りながら、物思いにふけていた。

自分と同年代ぐらいの子供達が広場のほうで遊んでいるが、その輪に入る気も起きず。

というより、どうやって輪に入ってもいいかも分からないし、遊ぶよりボーっとしながら考え事をしているほうが落ち着く。

正直、小学校でも孤立している感があり、両親も毎年この時期は泊りがけで仕事場から返ってこないせいか学校も無断で休んだりしている問題児だし。

まあ、自分の現状について考えることに精一杯なのだ。

…最初から、こんな自分の駄目っぷりをアピールしているのには相應の理由があるわけで。

そう、俺こと 瑞江^{みずえ} 柳^{りゅう} はいわゆる転生者という奴なのである。

別に電波で頭がやられたわけではなく、俺は本当に転生者なのだ。と、主張するたびに恥ずかしさに悶えそうになるが、兎に角、前世の記憶を持ってこの世に生まれてきたのだ。

といっても、前世の最後の記憶も普通に大学から帰宅して眠った記憶がなく、どうして転生したのかも分からないわけだが。

俺が生まれてからしばらくは自我というものがなく、2〜3歳ぐらいになってようやくまともに思考できるようになってきて、それから自分が生まれ変わったことを認識したのだ。

その後、俺は色々この世界について調べてみた。が、結果は芳しくなく、決定的な前世との違いが見つかるわけでも

なかった。

調べている最中の副次的効果として、両親や周りからは天才扱いされ【ギフト】を授かった子供だ、なんて喜ばれはしたけど、幼稚園児が毎日のように新聞を読み漁って歴史書を読み解いてる姿を不気味に思われないでこちらとしては本当に良かったと思っている。

で、結果として分かったことは少しある。

この地球は、転生前と微妙に違う。

例えば、俺の今住んでいる市は某県の風祭市というところである。風祭市は環境保護、自然との融和を目指して作られた町で、市全体を覆うように森がある町だ。本当にそこら中に緑があり、森の奥深くにはUMAがいる、なんて噂もある。

風祭市なんて市は聞いたこともなかったが、あったかもしれないし、覚えていないだけかもしれない。

でも、風祭の収穫祭なんかはTVで取り上げられたり、日本の有名な催しの一つとされているし、転生前ではなかった土地なのだろう多分。

例えば、日本マーター協会という地球保護活動を支援し啓蒙することを目的として設立された科学団体というのがあって、世界規模で活動している団体ではあり、前世にはなかった団体だが調べてみても特におかしなところは何もなかった。古くからある団体で、自然環境を何とかしようと本気で取り組んでいるイメージを感じた。

最近は両親が良く家を留守にするのでマーターの研究発表会に暇つぶしに見に行ったりしたがまともなことを言っていた。少し、極端な考え方をしている部分もあったけど、会の人は人当たりも良く、優しい人が多いので小学校に馴染めない俺はよく暇つぶしにマーターに行ったりする。

そんな感じで色々調べまわってみても、結局そこに自分が求める異常な【なにか】を発見することはできなかった。

……俺が求めているものは剣や魔法あふれる特殊な世界で、こんな少しの差異がある普通の世界に転生した意味が分からなかった。わけもわからず転生したのだから、何か、そこに意味が欲しかった。どうせなら、前とは違う別の何かになりたかった。

分かりやすく、神様っぽい人が出てきて「間違えて殺しちゃったから転生させてあげよう」なんて言われた方がまだ納得できるというものだ。

でも結局は、それもいいわけだ。

今こそ、両親や周りからちやほやされているが、このまま高校、大学とあがっていけば努力をしない俺はまさしくただの一般人になるだろう。

体を鍛える努力をしているわけでもないし、前世より良い大学に行こうと勉学に励んでいるわけでもない。

何もやりたくないし、何をやっていいのかわからないのだ。

道しるべもなく、今までの生活が一変して、自分が培ってきた土台というものが消えてなくなってしまった。

残っているのは前の経験と知識ぐらいで他には何もない。

自分の考えが我がままだということは分かっているのだ。

世の中には自分より大変な人はたくさん居るだろうし、五体満足で優しい両親に囲まれて、不自由なく過ごしている俺は幸せだということもわかっている。

後は、その知識と経験を活かして日本の最高学府でも入ってエリートな会社に就職して…………。

くだらない。

だけど、それが生きるということだ。日常だ。
ゲームや漫画じゃあるまいし変な憧れを探すのはもう止めにしよう。
そうしよう。

うん、そう決めた。

何で、心の中で嘯いてみても結局、自分は。

「はあ」

いつもと変わらない帰結に達してひとつため息をついたところで、俺は目の前に立っている少女の姿に気が付いた。

その少女はなかなか自分に気が付かなかった少年に対していらだっているのか、無表情ながらもどこか慥然とした様子でこちらを見ている。

「りゅー」

「あー、朱音かぁ。また『えにしの家』を抜け出してきたのか」

俺のことをりゅーと呼んだ少女は千里朱音。えにしの家という孤児院にいる女の子だ。

よほど辛い過去があったのか俺と同じぐらいの年齢にもかかわらず、まだ言葉をまともに話せないし感情もあまりおもてに出さなかった。

一ヶ月ぐらい前に同じようにベンチに座って物思いにふけっているときに、朱音は俺の前にあらわれた。

あの時も、いつものように思考に耽っていて目の前に朱音が立っていたんだっけ。

良く理由は分からないが適当に相手をしていたら何やら気に入られ…というのは嘘になるな。

はじめは言葉が話せないなんて知らなかったから、無理やりにも

名前を呼ばせようと黙っている朱音を不審に思いながら根気良く話しかけた結果…懐かれたような気がする。とりあえず、名前は呼んでもらえるようになったかな。

「ぶーぶー」

「分かったよ、今日も散歩でもするか」

まあ名前以外はほとんど喃語で、俺のことをすっかり認識しているのかも怪しいけど。

でも機嫌が良い、悪いぐらいは分かるようになってきたし、最初の頃と比べたら進歩したな。

そんな朱音は散歩するのが好きで、たいてい出会った日は俺の服の裾を掴んで町中を夕方になるまで練り歩くのだ。

俺がベンチから立ち上がるといつものように朱音は服の裾を掴んで歩き出した。

今日も気の向くまま朱音は歩いていく。

俺はそれを少し羨ましく思う。

前世も今も、特にやりたいことがあるわけでもないからなあ。
いや昔のほうがまだやる気があったかもしれない。

こうやって自由に好奇心のままに動く朱音が眩しい。

朱音と歩いていると子供の頃の活発な心を取り戻せる…気分になる。
この子がまともに喋れるように頑張ってみるのも良いかもしれないな。

「よし、で、今日はどこに行くんだ」

「んー」

「あ、待て、森は危ないからダメだって言われてるだろ」

「ちっ」

て、舌打ちかよ。たまに意味が分かってるんじゃないかって思うときもあるがどうなんだろ。

学校にも行かないでうじうじと進歩のない考えをしているより、朱音の世話をしているほうがよっぽど建設的かもしれない。

歩きながら再び考える。

何にしても、いつまでもこのままじゃいけないということは分かっているんだ。

うん、収穫祭が終わったなら両親に相談しよう。

収穫祭後はいつも暫く休みを取って、遊びに連れて行ったりしてくれるしその間に目一杯話そう。

自分の思い、将来のこと、小学校のこと、朱音のことも。

そこからはじめていこう。

「って、だから森のほうには行くなって!」

「うー」

気分も新たに俺は歩きはじめるのだ。

折角、若返って人生やり直してきたんだ。

もっとポジティブに生きよう。

と、前向きに生きていこうと思ったそんなとある秋の日。

収穫祭まで後3週間。

ブローグっばい(後書き)

THE 説明回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9555v/>

rewrite オリ主転生であーだこーだ

2011年10月5日14時24分発行